

Title	韓国語ソウル方言の語頭および語中の母音間における平音・激音・濃音の実験音声学的研究
Author(s)	韓, 喜善
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59883">https://hdl.handle.net/11094/59883</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	韓 喜 善
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 25754 号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化専攻
学位論文名	韓国語ソウル方言の語頭および語中の母音間における平音・激音・濃音 の実験音声学的研究
論文審査委員	(主査) 教授 渡部 眞一郎 (副査) 教授 郡 史郎 准教授 難波 泰治

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、韓国ソウル方言における平音、激音、濃音の音声学的特徴を明らかにすることを目的に、以下の3点の研究課題について検討した。

第1に、従来主に研究されてきた、破裂音の平音・激音・濃音についてだけでなく、破擦音と歯茎摩擦音（以下、摩擦音）について、さらに語頭と語中の母音間について検討を行い、これまで断片的に行われてきた平音・激音・濃音に関する音響的検討を網羅的に行った上で、常に一定の関係を示す音響的特徴を明らかにする。

第2に、文中の位置と発話意図の違いによって平音・激音・濃音にどのような音響的变化が見られるかについて検討した。

第3に、知覚実験においてもこれまで音響の手がかりとして指摘・検討されてきた要因について網羅的に検討を行わない、音響分析において常に一定の関係を示した音響的特徴が、知覚判断においても有効かどうか、さらに、破裂音・破擦音・摩擦音のそれぞれの場合に同様の知覚判断がなされるかについて検討する。

以上3つの課題に対して、以下の手順で検討を行なった。

生成実験については、音響学的検討では20-30代のソウル方言話者男女6名を対象に行った。テスト語は、/taka, t<sup>h</sup>aka, t'aka, tsaka, ts<sup>h</sup>aka, ts'aka, saka, s'aka, ata, at<sup>h</sup>a, at'a, atsa, ats<sup>h</sup>a, ats'a, asa, as'a /の16個の無意味語である。現実に近い自然な音声データを得るために、調査者が被験者にあらかじめ準備したリストに基づいて質問し、被験者が自然にテスト文の中にテスト語を入れて答えるように誘導する問答形式による録音を行なった。録音は無響室で行い、休憩時間を含め一人あたり約2時間で行った。テスト文とテスト語はランダムに配列し各10回くり返し、計3840の音声データを収集した。テスト文は、「子音間で常に一貫した関係を示す音響的特徴は何か」と「平音・激音・濃音は文中の位置、発話意図によってどのように音響的に変化するか」という二つの検討ができるように、テスト語が文頭と文中に位置する場合を設定し、さらにテスト語にフォーカスが置かれる場合とそうでない場合を加え、計4つの状況について検討を行なった。検討項目は、各分節音の長さ、母音の高さとその形状、母音の強さとその形状、母音のフォルマントとその形状である。このうち、破裂音と破擦音の子音部の分節においては、VOT (voice onset time: 有声開始時刻、Lisker and Abramson 1964) という従来の測定基準を用いず、語頭と母音間の両方で破裂音と破擦音の子音部を同一の基準で測定が可能なRVOWT (release to onset vowel onset time: 子音の閉鎖の解放から後続母音の開始までの区間) という新しい概念を取り入れて行なった。音響分析で得られた結果は、全発話に常に一貫した特徴を示す音響的特徴の有無、文中の位置と発話意図によって各子音の音響的特徴はどのように変化するかについて検討を行なった。

生理学的検討は、平音・激音・濃音の調音の仕方について調査するために行った。筆者（ソウル方言話者、女性、録音当時20代後半）とソウル母語話者30代男性の音声について、（破裂音・破擦音）子音破裂時および（摩擦音）子

音生成時における呼気流量、両唇破裂音の閉鎖時における口腔内の圧力、両唇破裂音の子音閉鎖中の口腔内での圧力の継続時間について調査した。テスト語は/ pa, p<sup>h</sup>a, p<sup>ʰ</sup>a, ta, t<sup>h</sup>a, t<sup>ʰ</sup>a, ka, k<sup>h</sup>a, k<sup>ʰ</sup>a, tsa, ts<sup>h</sup>a, ts<sup>ʰ</sup>a, sa, s<sup>ʰ</sup>a, apa, ap<sup>h</sup>a, ap<sup>ʰ</sup>a, ata, at<sup>h</sup>a, a t<sup>ʰ</sup>a, aka, ak<sup>h</sup>a, ak<sup>ʰ</sup>a, atsa, ats<sup>h</sup>a, ats<sup>ʰ</sup>a, asa, as<sup>ʰ</sup>a /の28個の無意味語である。録音は静かな部屋で行い、各テスト語はランダムに配列して各10回発音したものを記録した。

知覚実験は、20-30代のソウル方言話者男女5-13名の協力者を対象に行った。音響分析で得られた結果に基づき、常に一貫した傾向を示す音響的特徴が知覚判断にも有効かどうかという課題について検討を行なった。調査項目は、語頭では(破裂音・破擦音)RVOWT、(摩擦音)摩擦区間長、後続母音、後続母音の高さ、後続母音の開始部と中間部、後続母音長であり、母音間では、先行母音、(破裂音・破擦音)RVOWT、(破裂音・破擦音)無音区間長、(摩擦音)摩擦区間長、後続母音、後続母音の開始部と中間部である。刺激音に使用した音声は、実験の種類によって筆者および30代男性の音声の両方またはそれらのいずれかを使用した。テスト語は/ta, t<sup>h</sup>a, t<sup>ʰ</sup>a, tsa, ts<sup>h</sup>a, ts<sup>ʰ</sup>a, sa, s<sup>ʰ</sup>a, ata, at<sup>h</sup>a, at<sup>ʰ</sup>a, atsa, ats<sup>h</sup>a, ats<sup>ʰ</sup>a, asa, as<sup>ʰ</sup>a /の16個の無意味語である。作成した刺激音は5回ずつランダム配列し、静かな部屋で実施した。各実験は約20分間所用し、聞こえる音声は「平音」「激音」「濃音」のうち、どれに聞こえるか選択肢から一つだけ選ぶよう指示した。摩擦音の非濃音/s/については、「平音」にチェックを入れるように指示した。

以上のような実験手順によって、3つの課題について検討した結果、以下の7点が明らかになった。

(1) 平音・激音・濃音の間において常に一貫した関係を示す音響的特徴の存在

文中の位置、発話意図にかかわらず、これらの子音間において常に一定の関係を示す音響的特徴が存在していた。また、常に一定の関係を示す音響的特徴は、語頭と母音間でその内容が異なっていた。従って、特定の音環境で得られた音響的特徴だけでは平音・激音・濃音を特徴付けることができないことが明らかになった。

(2) 音環境による生成と知覚判断の違い

音環境が語頭か母音間かによって、破裂音・破擦音の平音・激音・濃音、および摩擦音の非濃音と濃音の生成の仕方は異なり、それによって音響的特徴も変化していることが明らかになった。知覚判断の仕方においても語頭と母音間では異なることが明らかになった。

(3) 常に一貫した音響的特徴の知覚判断における有効性

常に一貫した音響的特徴は、知覚判断において有効である場合と有効でない場合の両方が存在した。

(4) 破裂音、破擦音、摩擦音における特徴

破裂音と破擦音における平音・激音・濃音の生成上の特徴と知覚判断については、双方において類似した特徴を示した。しかし、摩擦音の非濃音と濃音は、生成と知覚のどちらにおいても破裂音・破擦音とは異なる特徴を示しており、破裂音と破擦音の実験結果をそのまま摩擦音に当てはめることはできないことがわかった。この結果から、摩擦音の非濃音/s/を平音と激音のどちらに分類すべきかという問題は、現在の音声学的枠組みでは判断できないことが明らかになった。

(5) 平音・激音・濃音の知覚判断

平音・激音・濃音(摩擦音では非濃音・濃音)の知覚判断には複数の音響的特徴が関与していた。破裂音・破擦音と摩擦音との間で弁別に関わる音響的特徴は異なっていたが、平音・激音・濃音(摩擦音では非濃音・濃音)の知覚判断は、語頭では後続母音によって100%弁別が可能であり、母音間では子音部全長と後続母音の両方が関与していた。このように、平音・激音・濃音(摩擦音では非濃音・濃音)の知覚判断には後続母音の影響が大きいが明らかになった。

(6) 文中の位置による平音・激音・濃音の生成上の特徴

文中の位置による平音・激音・濃音の生成上の特徴への影響はほとんどなかった。

(7) 発話意図による平音・激音・濃音の生成上の特徴

破裂音・破擦音の平音・激音・濃音、摩擦音の非濃音と濃音において、発話におけるテスト語のフォーカスの有無は、分節音の長さだけでなく、高さ、強さ、フォルマントにも影響を及ぼすことが明らかになった。

以上のような「平音・激音・濃音の弁別に関わる要因の総合的検討」の結果は、生成と知覚の両方から平音・激音・濃音の音響的特徴をより明確にすること、平音・激音・濃音の音韻的位置づけの見直すための基礎的データとして用いることができるという研究的な面においてのみならず、韓国語を外国語として教える際に弁別の手がかりとなる音響的特徴を、単に理想的な状況だけでなく、子音が現実の音声として生成される場合にどのように関与するかを明示するという教育的な面においても意義があると考える。

現代韓国語には、日本語の子音に見られる清濁(無声・有声)の音韻的区別がなく、平音、激音、濃音と呼ばれる3種類の音韻的区別が存在する。これらの3種類の子音は、音声的には英語をはじめ諸言語でも見られるものに相当すると考えられるが、それらの言語では弁別の機能をもたない。韓国語の平音、激音、濃音が弁別の機能をもつということは言語類型論の見地からすると極めて珍しく、この3種類の子音の音声的特徴について実証的に研究することは音声学・音韻論の観点からも重要である。本論文は、まさにその音声的特徴について、調音、音響、生理、知覚といった観点から考察し、様々な実験をほぼ網羅する形で行うことによって明らかにしようと試みたものである。従来の研究は個別の特徴についての断片的なものであり、また相互に矛盾する結果も多く含まれていて、平音、激音、濃音の違いに対応する音声特徴が何かについての問題を総合的な見地から考察するには不十分であった。本論文は、平音、激音、濃音の違いについて多角的に検討し、その違いに関わる諸々の音声特徴に関する総合的な実験研究成果を提示している。

本論文の構成は以下の通りである。第1章と第2章において、問題と研究目的の提示および先行研究の検討を行っている。検討した先行研究は本論文の研究課題に関わる日本、韓国を含む国内外の研究をほぼ網羅していて、要領よくまとまっているので、韓国語の平音、激音、濃音の研究の良い資料ともなろう。第3章、第4章、第5章の3章で本論文の実験データの分析と検討を行っている。本論文では破裂音だけでなく、従来あまり検討されていない破擦音と摩擦音(濃音・非濃音の区別のみ摩擦音には認められる)を研究対象として、語頭と語中の音声環境における平音、激音、濃音に関する実験音声学の検討を行っている。生成実験では、語内だけでなく文中の位置の違いや談話におけるフォーカスの有無による平音、激音、濃音の違いに対応する音響的特徴について検討している。さらに、発音時の呼気流量といった生理的な特徴を取り上げて、考察している。知覚実験では、平音、激音、濃音の知覚判断に関わる音声要因について実験分析を展開している。第6章が実験結果の考察、第7章が結びとなっている。

本論文の価値は、先行研究で検討対象となっていた平音、激音、濃音の違いに対応する音声的特徴について、ひとつの枠組みで同時に検討することで総合的な見地からの考察を行っている点にある。また、従来あまり考慮されてこなかった破擦音や摩擦音も考察の対象として、語内および文内における位置そして語用論的要因を検討項目に加えたことは、新規性・独創性の点で大いに評価されるべきところである。また、先行研究を十分よく検討した上で、様々な実験により収集した膨大なデータの分析と結論に導く議論の展開も一部改善すべき余地はあるものの概ね妥当な形で行われていて、この点も評価できる。但し、分析過程において先行研究の結果との対比を行うことにとらわれて、先行研究の枠から抜け出ていないところが見られることが惜まれる。しかし、この点は本論文の価値を損ねるものではないと考える。

以上により、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として価値のあるものと認める。